

[果樹部門]

7. 「紫苑」の現地栽培園における栽培上の課題とその要因

[要約]

現地の「紫苑」無加温栽培園では、新梢が細くなる傾向が認められる。この要因の一つは着果過多による樹勢の低下と考えられ、花穂数の減少や果粒肥大の不足につながっている。

[担当] 果樹研究室

[連絡先] 電話086-955-0276

[分類] 情報

[背景・ねらい]

「紫苑」は、「グロー・コールマン」の代替品種として約10年前から温室ぶどう産地に導入されており、岡山県では「次世代フルーツ」として生産振興を図っている。しかし、品質のばらつきが大きく、生産が不安定である。そこで、現地の課題とその要因について検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1．現地栽培園の新梢の太さは2009年から2011年にかけて細くなる傾向にあり、花穂数もほとんどの園で減少している（図1）。
- 2．前年の着果量が多い樹で、翌年の新梢基部径が小さくなる傾向が認められる（図2）。
- 3．前年の新梢基部径と翌年の花穂数には正の相関が見られ、前年の新梢が細いほど、翌年の花穂数が少ない傾向が認められる（図3）。
- 4．当年の新梢の太さと果粒の大きさには正の相関が見られ、新梢基部径が太いほど、果粒が大きい傾向が認められる（図4）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．現地調査は、岡山農業普及指導センターと協力し、岡山市北区の栽培園（5～10年生樹、フランチ）で実施したものである。
- 2．高品質安定生産のためには適正着果量（2.1t/10a）の遵守が重要である。
- 3．現地では、土質や土壌の理化学性による樹勢のばらつきが大きいため、着果制限の他、土壌管理等の総合的な対策が必要である。

[具体的データ]

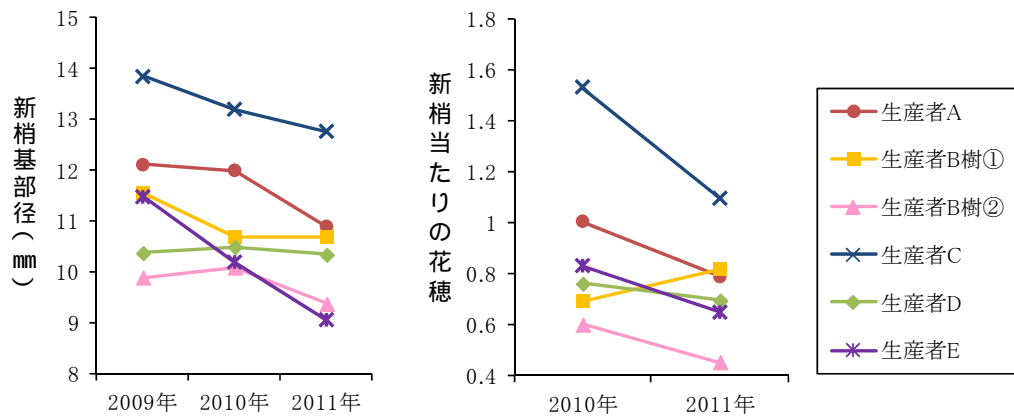


図1 「紫苑」の新梢基部径及び花穂数の年次変化（岡山市北区 2009～2011年）

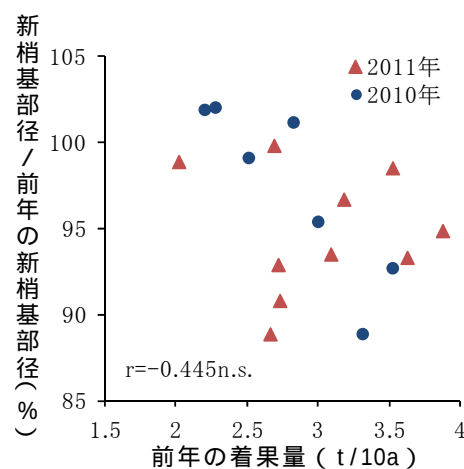


図2 「紫苑」の前年の着果量と新梢基部径の増加率との関係
図中の n.s. は有意差がないことを示す。

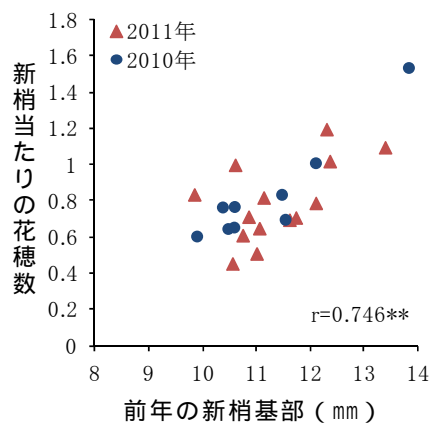


図3 「紫苑」の前年の新梢基部径と新梢当たりの花穂数との関係
図中の**は1%水準で有意差があることを示す

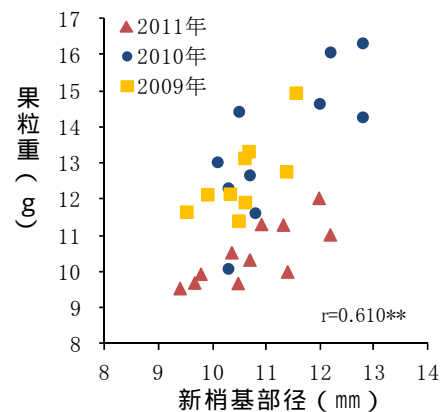


図4 「紫苑」の新梢基部径と成熟果粒の果粒重との関係
図中の**は1%水準で有意差があることを示す

[その他]

研究課題名：「紫苑」の安定生産技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2009～2011年度

研究担当者：高橋知佐、北川正史、小林一奈、尾頃敦郎